話題６２　　ティータイム（１）「看取り」

高齢化社会を迎え、「看取り」という用語が頻繁に用いられるようになった。この「看取り」という用語には的確な英語の訳が無いとのことである。個人主義の発達した社会と「縁」「絆」を重んじる社会の相違かもしれない。

欧米諸国においては、看取られる側が主役である。しかし、日本においては、どちらかと言うと看取る側の思いが先行する。

尊敬する老師の言葉である。「人は、病気で死ぬのではない。人は、寿命で死を迎えるのです」・・・と。この「寿命」にも個々に長短があり、濃淡があり、与えられた現実を理解し、受け止めることは至難の業である。

９８歳のお婆さんが肺炎になった。抗生剤の点滴を拒否された。いわく、「私は、こんなにも長生きした。点滴は止めてください」と言い切った。やむなく、内服の抗生剤を用いた。お婆さんの気力が勝り、肺炎は治癒。お婆さん、携帯電話を使いこなしている。近々、スマホに切り替えるのでは。

９８歳、経管栄養。寝たきり。コミュニケーションがとれない。しかし、取り巻きの家族は積極的な治療を望んでいる。様態の悪化の際は、総合病院への転院を希望している。コミュニケーションが完全に断たれた病態の延命には課題が残る。

極端な事例を示したが、人の「寿命」に関する話題が、元気な時に、各家庭のティータイムに、気楽に話し合われることにより、より良い生き方の話題につながるのではないかと考える。

琉球新報　2018年6月2日

ティータイム

看取り

石川　清司

高齢化社会を迎え、「看取り」という用語が頻繁に用いられるようになった。「看取り」という用語には的確な英語の訳が無いとのことである。個人主義の発達した社会と「縁」「絆」を重んじる社会の相違かもしれない。欧米諸国においては、看取られる側が主役である。しかし、日本においては、どちらかと言うと看取る側の思いが先行する。

尊敬する老師の言葉である。「人は、病気で死ぬのではない。人は、寿命で死を迎えるのです」…と。この「寿命」にも個々に長短があり、濃淡があり、与えられた現実を理解し、受け止めることは至難の業である。

98歳のおばあさんが肺炎になった。抗生剤の点滴を拒否した。いわく、「私は、こんなにも長生きした。点滴は止めてください」と言い切った。やむなく、内服の抗生剤を用いた。肺炎は治癒。おばあさん、携帯電話を使いこなしている。近々、スマホに切り替えるのではと、思うほどだ。

98歳、経管栄養。寝たきり。コミュニケーションがとれない。しかし、取り巻きの家族は積極的な治療を望んでいる。容体の悪化の際は、総合病院への転院を希望している。

極端な事例を示したが、人の「寿命」に関する話題が、元気な時に、各家庭のティータイムに、気楽に話し合われることにより、より良い生き方の話題につながるのではないかと考える今日この頃である。

（名護市、介護老人保健施設「あけみおの里」施設長、69歳）